

震災後に想う

鷹泉閣岩松旅館 畑中 健一

東日本大震災からまもなく4年が経ちます。当時、当館では源泉の温度が下がったり(震災前は約55℃が約35℃に)、温泉の湯量が減ったりと温泉旅館にとっては大きなダメージがあり、営業再開の目処も立たない状況でした。当日の夜は、約100名のお客様が当館まで辿り着き避難されて来ました。電気もガスも暖房も入らない中、この方々の安全を確保しながら宿泊して頂き、懐中電灯とろうそくの明かりの中で食事を提供したことは忘れられません。また、エレベーターが動かない為、非常階段で客室まで行っていただいております。

翌日から、お迎えの方が来たり、ご自身で運転して帰路についたり様々な方法で旅館から出発されて行きました。5日後には、全てのお客様が何らかの方法で家路につかれました。

余談ではありますが、地震の直後から広瀬川の水の色が抹茶ミルクの様な色合いになっており、今になれば水を取っておき分析してもらえば、面白い研究材料になったのではないかと社内でも話題になりますが、その時は思いもよらなかったことです。

3月の下旬からは、源泉の温度はまだ戻りませんでしたが、被災した方々に女川・亘理などからお越し頂き、重油がようやく手に入り、ボイラーで湯を沸かし、熱いシャワーと軽食でおもてなしをして喜んでお帰り頂きました。4月には大阪からガス工事の手伝いに来

た方々に宿泊していただいたのを始めとし、少しずつ営業を再開しました。6月には、やっと源泉の温度や湯量も震災前の数値に近づき、現在こうして何事もなかったかのようにお客様を受け入れていただけるのが不思議に思います。

最近では、ゲリラ豪雨やそれに伴う土砂崩れや洪水・台風の大型化・火山の噴火・竜巻・暴風など様々な想定外の自然災害が起き、地震や火事とは別の対策が必要に感じられます。そこで思うのは、「予防(予測)」です。「備えあれば憂いなし」との諺も昔からありますが、事前に対応を考え、訓練して、咄嗟の場合も直ぐに対処出来るようにしておくことが、いかに大事なことかと痛感します。特に当館は、広瀬川の川沿いに1796年(寛政8年)に開湯した岩風呂があり、ゲリラ豪雨が山形県と宮城県の県境に降った場合は、広瀬川の水量が急激に増して、一気に岩風呂に冠水するかわからない状況になることもあります。雨の状況により天気予報を確認しながら、スタッフの配置やお客様への情報提供を行い、事故が無いように気を配っております。

最後になりますが、これからも基本となる防災・避難訓練を消防署の指導を受け、重要性をスタッフ全員が理解し、お客様が安全に宿泊できる旅館となるように努力していきたいと思います。



天然岩風呂



消火器取扱訓練